

## みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように

(マタイによる福音書 6 章 10 節)

# 誠実な社会人、キリストに倣う者 \* 訳注

[\* 訳注：サレジオ会日本管区ではストレンナ標語“BUONI CRISTIANI E ONESTI CITTADINI”について、キリスト教徒でない協働者や若者と共に受けとめ、分かち合い、実践できるように、日本語訳を「誠実な社会人、キリストに倣う者」とした。本稿では文脈によって直訳の「良いキリスト者、誠実な市民」も用いる。]

## はじめに

何人かの会員と共に今年のストレンナについて考えていたとき、この話題がどれほど重要で心を魅了するものであるか、はっきりと見てとれました。とても簡単な題ですが、幅広く複合的に展開するものです。この数週間の作業を経て、このことをさらに明確に理解しました。これは心を魅了し、役に立ち、複眼的な題であると私には思われます。

私たちサレジオ家族に、各会に、私たちの暮らすそれぞれの国で、非常に多様な事業がある中で、キリスト者の育成、社会人の育成に関わる諸側面を精察する必要があると私は心から確信しています。

→ 私たちの使命は福音宣教、そしてカテキズム・信仰の教育であるというメッセージを、ますます明示する必要があります。これを行わないなら、私たちはサレジオ家族ではありません。「福祉サービスの提供者」にはなっても、子どもたち、十代の若者や青年たちの使徒ではなくなります。

→ 同時に、教育者としての使命において私たちは、あたかも教育が、生活、正義、機会の均等、弱い人々の擁護、文明的で人間らしい生き方の促進と何ら関わりがないかのように、‘中ぶらりんの状態で生きる’ことはできません。この問題は、私たちの暮らす社会がこれらの価値をあまり信じなくなっている昨今、ますます差し迫った必要となっています。教育を行うとき、私たちは誰のためにあるのでしょうか？ まさにこの問いの重要性のため、今年のストレンナをふりかえることは、実に意義深く、必要なことなのです。

→ さらに、新たな困難があります。ドン・ボスコの二文から成る教育の表現、19 世紀イタリアで彼を導いたその目標は、今も「サレジオ世界」で有効だと言えるでしょうか。その「サレジオ世界」では、ドン・ボスコの家族が異なるさまざまな宗教、キリスト教ではない人々が多数を占める、あるいはキリスト教が過去のものとなった社会、または公けに世俗主義あるいは反宗教主義でさえある国々に暮らしています。

キリスト教でない社会においてキリスト者であることについて語るストレンナという、この最後に述べた側面に関して、そのような状況に置かれている地域から私はいくつかの質問をもらいました。それを皆さんにご紹介します。司牧上、大変デリケートな問題を確かに含んでいるからです。ここにそのいくつかを挙げます：

「キリスト教でない人（他の宗教、不可知論の人々、宗教に無関心な人々）が大多数の環境に置かれた管区で、このストレンナは、「キリスト教でない」あるいは「キリスト教が過去のものとなった」場における教育活動であっても、振り返りの機会やさまざまな考え方を提供することに成功するなら、よく受けとめられるでしょう。ドン・ボスコのこの教育的表現を、キリスト教徒でない協働者や若者が受け取り、理解し、歩み、実践できるようにするには、どのように紹介することができるでしょうか。」

「ドン・ボスコの時代、キリスト者が大多数を構成する社会では、社会的に貢献する人になるということは、真正な宗教的精神のしるしでした。

他方、今日、このカリスマが広がった世界 134 か国で、私たちは、キリスト教徒でない若者と協働者「のために、そして彼らと共に」ある教育的歩みに人々を招き入れる開かれた姿勢を持ちながら、イエス・キリストを伝える第一次福音宣教に目を向け行動することとのバランスを保つ必要を感じているでしょうか。（予防教育法は福音宣教の最良の媒体になります。人間的絆、家庭的雰囲気を生み出し、その雰囲気の中で信仰もまた教えられ、少しずつ浸透することによって伝えられます。）」

「40 に上るサレジオ会管区の置かれている多文化、多宗教の環境を考慮する必要があります。それらの管区は、特にアジア、アフリカで、世界の偉大な諸宗教に囲まれた少数派の教会の中で生きています。」

「ドン・ボスコが 19 世紀に行った原則を繰り返すだけでは十分ではありません。今日、キリスト教徒でない人々が大多数の国々で予防教育法を生きるサレジオ会員の体験から、私たちは学ばなければなりません。その会員たちは確かに、我らの父ドン・ボスコが想像もしなかった多宗教、多文化の環境での生活体験、ドン・ボスコの思想を理解し活かす体験を多く豊かに持っているのです。」

**誠実な社会人、キリストに倣う者 - キリスト教でない人々、あるいはキリスト教が過去のものとなった人々が多数を占める環境で**

私たちはいくつかの問いを自らに投げかけることができるでしょう：

- ・ キリスト教徒でない子ども・若者や協働者・ミッション・パートナーと共にある私は、ドン・ボスコの表現・やり方をどのように実践しているだろうか。
- ・ キリスト教徒でない人への開かれた姿勢と福音の第一次宣教とのバランスをどのように取っているだろうか。
- ・ 「良いキリスト者—キリストに倣う者」という考えを、キリスト者でない大多数の協働者にどのように伝えているだろうか。
- ・ 私たちが暮らす多宗教の環境で、柱の一つ「信仰」をどのように実践しているだろうか。
- ・ ドン・ボスコの予防教育法の霊性の 3 つの柱—道理・信仰・慈愛—における教育を、若者、信徒・協働者のためにどのように実践しているだろうか。

- ・ キリスト教徒でない多くの人と分かち合う使命の中で、ドン・ボスコの「良いキリスト者ーキリストに倣う者」を、日々の生活でどのように生き、活かしているだろうか。
- ・ 総長は、ドン・ボスコの予防教育法を、他の宗教を持つ協働者とも、あますところなく生き実践することが可能だと信じているのだろうか。
- ・ キリスト者でない人々に、教育司牧共同体（EPC）にどのように参加してもらっているだろうか。
- ・ サレジオの教育的使命に参加するキリスト者でない人々自身、どのように言っているだろうか。
- ・ ドン・ボスコの予防教育法の実践の、最も魅力的な要素・表現は何だろうか。

私のストレンナ解説の中に、これらの問いに何らかの形で答える提案を皆さんは見いだすことと思います。これらの問いは私が受けたもので、明らかに当然の、なくてはならない問いかけです。

## 1. ドン・ボスコにおける「良いキリスト者、誠実な市民」<sup>1</sup>

教育の目標を表すこの言葉は、ドン・ボスコ自身が用い、示したもののなのかと、尋ねる人もいるでしょう。この点は、ブライド神父が学術的情熱を注いで取り組んだ課題です。まさにこの言葉で、あるいは話す相手によって若干表現を変えながら、非常に似た言葉をもって言い表したこの特定の教育の道、歩みをドン・ボスコが常にたどったということ、ブライド神父は理解させてくれます。しかし、若者の教育と社会の善益の関係という問題は、永遠の救いの問題と共に、常に一貫しています。実際、この二文から成る表現は、ドン・ボスコの生涯の歳月の間に、次のさまざまな言い方で用いられています：

→ 若者を誠実な市民、良いキリスト者に育てる (1857)

→ 若者たち自身を良いキリスト者、誠実な働き手に育てる (1857)

→ 若者が皆、良い市民、良いキリスト者となるように (1862)

→ 若者皆を良いキリスト者、誠実な市民に育てる (1872)

→ キリスト者の尊厳、良い市民としての責任感を備えるよう若者を教育する (1873)

→ 若者が良いキリスト者、誠実な市民となる (1875)

→ 青少年が信仰の面では良いキリスト者となり、社会においては誠実な市民となるよう、見捨てられた青少年のため、少しでも私にできるかぎりの善を行い、自分のあらゆる努力を尽くす (1876)

---

1 ドン・ボスコの心を表し、実にサレジオらしい固有の表現、「良いキリスト者、誠実な市民」という二文から成る言葉に目を向けるこのストレンナ解説の内容は、ピエトロ・ブライドによって幅広く考察され、深められている。Pietro Braido, *Buoni cristiani ed onesti cittadini*, RSS, vol. 24, 1994 (p. 36-42)

→ 教会のために善いキリスト者を、社会のために誠実な市民を育成する (1877)

ドン・ボスコは多くの書き残したものの、特に手紙の中で、二文から成る教育的・司牧的表現を、次の言葉で明確に定義しています (いずれもブライド神父による実証的-歴史的資料より) :

- \* 若者を良い市民、良いキリスト者にするのは、私たちが自らをささげる目的です ;
- \* 若者を良いキリスト者、誠実な市民に育てる ;
- \* 若者は……社会に貢献する市民、良いキリスト者 ;
- \* 若者は良いキリスト者、誠実な市民になります ;
- \* 若者はこのオラトリオに入るとき、この場所が信仰の場であり、良いキリスト者、誠実な市民を育てることが目的であると、自ら納得する必要があります ;
- \* 若者が良いキリスト者、良い市民として社会に復帰するようにする ;
- \* キリスト者として、市民としての徳において教育された若者 (… ) を良いキリスト者、誠実な市民に育てる ;
- \* 若者を誠実な市民、良いキリスト者に育てるといことです ;
- \* 良いキリスト者、賢明な市民としていつも生活すること ;
- \* 若者が良いキリスト者、誠実で社会に貢献できる市民となる希望 ;
- \* 今、彼らは良いキリスト者、誠実な市民です ;
- \* あなた方が良いキリスト者、立派な市民として生活しているのを (… ) 知り私は大いに喜んでいきます ;
- \* どこにしようと、あなた方がいつも良いキリスト者、正直な人間であることを示してください ;
- \* 私たちの学校の目的は、良いキリスト者、誠実な市民を育成することです ;
- \* そして、良いキリスト者、誠実な市民となって社会に戻ることに ;
- \* 生徒たちは、良いキリスト者、立派な市民となって巣立って行きます ;
- \* 若者を良いキリスト者、誠実な市民として社会にお返しする ;
- \* 良い市民、まことのキリスト者となるよう、若者を教育する ;
- \* 良いキリスト者、そして誠実な市民 ;
- \* 良いキリスト者、賢明な市民として生きることを学ぶ ;
- \* 良いキリスト者、賢明な市民として生きることを教えられる ;
- \* 若者は良いキリスト者、賢明な市民となります ;
- \* 良いキリスト者、社会に貢献する市民となるよう若者を育てる ;
- \* ですから、良いキリスト者、賢明な市民でありつづけてください ;
- \* 市民社会には貢献する市民を、教会には徳を備えたカトリック信徒を、天国には幸いな住人を与える ;
- \* 若者を良い市民、良いキリスト者に育てる ;
- \* 市民社会に、良いキリスト者、誠実な市民として……若者を復帰させる ;
- \* キリスト者であると同時に誠実で勤勉な市民であり……うることを、若者たちは世に示します ;
- \* 良いキリスト者、誠実な市民となるよう、若者を教え、教育します ;
- \* どれほど多くの良い息子たち、多くのキリスト者である誠実な父親たち、さらに多くのより良い市民を、私たちは家庭、教会に、社会に与えることができるでしょう ;

\* 若者自身、良いキリスト者、誠実な市民となります；

\* 若者たちを、良い息子、賢明な市民、模範的なキリスト者として、家庭に、社会、教会にお返しする；

ご覧のように、一つの楽曲であるかのように旋律は常に同じで、さまざまなニュアンスがあります。ブライド神父はこのことを、疑う余地のない形で研究の中で示し、ドン・ボスコが理論家ではないことを理解させてくれました。ドン・ボスコは行動の人です。しかし、自らの司牧活動の意味を‘ふりかえる’行動の人です。したがって、ドン・ボスコの用いる言葉や表現する考えが、単純な繰り返されるものであることは驚くべきことではなく、他方、ドン・ボスコの行動の仕方が、さまざまな状況や問題についての知識のレベルでも、また、実施されるべき具体的解決策に関しても、非常に明確な‘理論的’意識をもって、よく特定された道筋をたどるものであることが明らかです。この二つの側面は、ドン・ボスコにとって最も大切に、たびたび繰り返した表現の一つのうちに、特別な明確さをもって前面に現れます：「良いキリスト者、誠実な市民」です。

### 1.1 「良いキリスト者／キリストに倣う者」 - 主への信仰をもって、聖霊の導きのもと生きる……

12月の終わりに、ドン・ボスコが少年たち一人ひとり、そして最初のサレジオ会員たちに、それぞれへのメッセージをこめて新しい年のためのストレンナを与えた、その私たちの源泉に立ち帰るとき、「信仰を生きる」ことこそ、最初のオラトリオがそこに暮らす者に、少年たちにも、先生たちにも、差し出すことのできた最も貴く、最も自然なものであったことがわかります。それは、最初のサレジオ会員、オラトリオのマンマたち、手伝っていた人々、子どもたちが、同じ家で本物の家庭を築いていた、その生きた姿を反映していました。

非常に感銘を受けるのは、ドン・ボスコの生涯の間、その貧しい環境に暮らしていた聖人、福者の数の多さです。その生活は相互に伝え合う聖性の学び舎、信仰において共に成長することでした。例えば、ドン・ボスコが神への愛において成長するためにドメニコ・サヴィオを助けたことが真実であれば、神の人としての‘生涯養成’においてサヴィオとその仲間がドン・ボスコに与えた影響も、それに劣らないものだったのです。「信仰は、他者に伝えられるときに強められます。」<sup>2</sup> 深く生きる信仰という相互的な贈りものから聖性の学び舎が生じ、世界中のサレジオ家族の霊的歩みを養い続けています。

信仰と生活の調和は、ドン・ボスコのカリスマの心・中心です。ドン・ボスコの顔、その生涯のうちに、「自然と恩恵のみごとな調和」を観想することができます。「人間味豊かな彼は、自国民の特性を豊かに身につけ、地上の現実に関心を開いていた。また、真に神の人であった彼は、聖霊の賜物に満たされており、『見えないものを見ているかのように』して生きていた」<sup>3</sup>。

「信仰を生きること」は、どのような生活の状況、年齢、召命であっても、また宗教が何であっても、今日、私たちが与え合うことのできる最も貴い贈りものです。教会を養い、そ

---

2 ヨハネ・パウロ二世回勅、救い主の使命 *Redemptoris Missio*, 2

3 サレジオ修道会 会憲, 第 21 条

の前進の歩みを変容させる、また教皇フランシスコが大いに実践し勧める、交わりの教会論において、各グループの、また一人ひとりのアイデンティティーは、他者への贈りものとなることのうちに生き抜かれ、明かされます。さまざまな人生の状況、さまざまな召命のうちに主の弟子となるよう呼ばれた人々の賜物を迎えることも同様です。

サレジオ家族の中で奉献生活者である私たちにとり、「信仰を生きること」は、それぞれの召命、それぞれの人の固有性のうちに具体化されながら、私たちが生き、差し出すように呼ばれているものの中心、心なのではないでしょうか。

私たち奉献生活者が「自然と恩恵の調和」の生きたしるし、神の呼びかけと愛と、自由に差し出す惜しめない日々の応答との、あの実り豊かな出会いの生きたしるしとなっていないなら、人生・生きることが意味を持つため、実に豊かな意味を持つために、ほかに寄り頼むべきどのような「畑に埋まった隠された宝」があるというのでしょうか。生きることが意味を持ち、塩、光となって、味をもたらし、共に暮らす人々の人生を照らすために。

生涯を全面的に主にささげた人々に若い世代が求めているのは、「輝くような、一貫性のあるあかし」であると、若者のためのシノドスは拍子抜けするほど単純な明快さで示しました。<sup>4</sup>

しかし、信徒、父母、若者についても同じことを言わなければなりません：信仰が賜物であるなら、信仰を生きることも、賜物です。それは個人の優れた技能や鉄のように強い意志の実りではありません。私たちのいかなる貢献も - これも恩恵と自由の対話の一部を成すものですが - 一人ひとりのうちに、共同体、サレジオ家族、教会のうちに、世界、歴史、全宇宙のうちにある、神の前もって計られる愛、聖霊の控えめながら効果的な現存の愛の外側にあるものでは決してありません。聖霊は創造する力であられ、一粒のからし種から神の国の大いなる木を成長させる、満ち満ちたいのちの実りをもたらすエネルギーです。

## 1.2. 「良いキリスト者／キリストに倣う者」- 私たちに語られる神に耳を傾けながら生きる

「注意深く心に向けて耳を傾けることほど、他者への大いなる贈りものはない。」これは、大きな都会の混沌とした辺縁で長年にわたり奉仕してきた、知恵深い宣教師がたどりついた結論です。

個人の同伴の基本的なわざでもある、耳を傾ける力を、私たちはさまざまな形で再発見しようとしています。耳を傾けることは、若者のシノドスが全教会に差し出した力強い促しとなりました。

また、さらに深く根を下ろす耳の傾け方があります。私たちが互いに耳を傾け合う傾聴の効力の大きな部分がそれにかかっています。この傾聴は、高みへと根を伸ばします。それはあらゆる召命のいろはであり、すべての新たな目覚めにおいて新たにされる、呼びかけと応答の出会いです。

---

4 司教シノドス、若者、信仰、そして召命の識別。作業用文書、175

神に耳を傾けることは、単なる実践や特定の時に限定することのできない神秘です。それは「聖霊の働きを通して」行われ、通常、突然の飛躍があるわけではなく、漸進的な成長を通して行われます。それは、聖書に語られる多くの歩み、また我々が聖人たちの生涯に見いだされる歩みのように、長い時をかけた巡礼の旅路によって達成される成長です。

神に耳を傾ける前提となる心の姿勢があります。それは、ソーシャルメディアの刺激が絶えずあふれ、活動のリズムがますます間断のないものになっている私たちの暮らす社会環境において、より貴重な、より難しいものとなっています。この貴重な前提となる心のあり方は、「沈黙の心」です。

沈黙は、神と人との間に交わされる言語の文法のようなものです。ほかのあらゆる言葉と異なる言葉があります。神が私たちに語られる言葉：聖書です。それは決して押し付けられるものではありません。常に、私たちの耳を傾ける姿勢にかかっています。心の調和、神と共に沈黙のうちにあることに慣れ親しむことにかかっています。このみ言葉に耳を傾けると、心情や考えは、福音が日々明かしてくれるものにかたどられるようになっていきます。周りの人々のうちに、自分に起こる出来事のうちに神に耳を傾けることによって、私たちの心はより目覚めて注意し、より深く物事を見るようになります。

このように歩みながら、耳にし告げ知らされることと生きられることとの間に、一貫性が育まれていきます。私たちに語られる神に耳を傾けることは、毎日の実践練習が必要です。芸術家やアスリートが、それぞれの卓越する専門分野で日々練習するのと同じように。

### 1.3. 「良いキリスト者／キリストに倣う者」 - 福音を宣べ伝え、第一次福音宣教とカテケージスを差し出すこと：「本会の起源は、簡単なカテキズムの教えにあります」(MB IX, 35)

「彼は青少年の救いをめざす以外には、一步も動かず、一言も発せず、どんな企てにも着手しなかった。……彼の心には靈魂のことしかなかった。」<sup>5</sup> ほかの誰よりもドン・ボスコをよく知り、「すべてにおいてドン・ボスコと半分ずつ分け合った人」のこの証言は、我々が父の牧者の愛の強さを、ほとんど手で触れるかのように理解させてくれます。「司祭になることを学ぶために」と、カファッツォから訪れることを勧められたトリノの刑務所に始まり、貧しさの最も過酷な挑戦を前にしても、ドン・ボスコは決して引き下がりませんでした。同時にドン・ボスコは、誰に対しても、サヴィオと同じようにマゴーネにも、道を各人に合わせながら、決して遠慮することなく霊的成長の最も高い目標を指し示しました。現代の言葉ではこれをこのように言っています：「わたしたちは神の忍耐にならい、青少年が達している自由の程度に合わせて彼らと付き合う。」<sup>6</sup>

この司牧アプローチの現代的表現は驚くべきものです。一人ひとりの若者の傍らで共に歩むことを知っています。それは最も試練を受け、困難に直面する若者たちの傍らにさえも寄り添い、まさにそこに福音の種を蒔くための良い土を見いだします。**信仰を押し付けることなく、そして恐れることなく。**なぜなら、聖霊が私たち家族の聖なる人々のうちに教

5 サレジオ修道会 会憲, 第 21 条, 1894 年 8 月 24 日のルア神父の言葉より

6 サレジオ修道会 会憲, 第 38 条

会にくださったカリスマが忠実に生きられるとき、信仰と生活が分離したことは決してないからです。

教皇フランシスコは、決して第一次福音宣教をおろそかにしたり、より適切な状況あるいはよりよい時が来ることを期待して先延ばししたりしてはいけない、と私たちに思い起こさせています。教皇は語っています：

「このことを『福音の喜び』でしばしば強調しましたが、それを思い起こしてみるのがよいでしょう。青少年司牧において『一見‘確実な’養成のために、ケリュグマについてのカテケージスを放棄しよう』考えることは大きな間違いです。『この告知よりも強く、深く、確実で、密で、知恵あるものはありません。キリスト教の養成はすべて、肉となり、よりよいものとなるまでケリュグマを深めていくことです』。ですから青少年司牧には、神の愛と、生きておられるイエス・キリストとに触れる、個人的体験を繰り返し味わい、深めるのを助ける機会が必須です。さまざまな手段があるはずです。あかしの分かち合い、歌、礼拝の時間、聖書を用いた霊的振り返りの時間、SNS を通じてのさまざまなきっかけもあります。ただし、主との出会いというこの歓喜の体験を、決して‘教え込む’たぐいのものに置き換えてしまってはなりません。」<sup>7</sup>

私たちは、第一次福音宣教の重要性を本当に信じているのでしょうか。若者の世界を、その全体をとらえながら見てみましょう：デジタル時代の速度、ものすごい速さで絶えず変化し、そのため、文化の、人生全体へのアプローチのとてつもない多様性が生まれ、かつて見たことのないような大きな溝が世代間に生じています。2000 年以降に生まれた人たちの世界は、いまだ福音宣教が行われていない領域なのではないでしょうか？ ソーシャルネットワークの世代、さらにインターネットの時代に生まれたこの千年期の若者は、自分たちの言葉で語り、同じ周波数で交信しながら、初めて福音の光と力を自分たちにもたらすことのできる人を待っています。

「誰を遣わそうか。誰が私たちのために行ってくれるだろうか」（イザヤ 6・8）。この<sup>いにしえ</sup>古のイザヤの言葉は、私たちサレジオ家族にあてた全教会共同体の唇にのぼる言葉としてとらえるならば、これ以上に現代的な言葉はありません。カリスマによって、聖霊の賜物によって、若者と出会うスペシャリストとなるべく生まれた者、ありのままの若者と、彼らのいるところで、たとえ信仰が異なるとしても、若者と共にいる心構えを備えた者としての、私たちサレジオ家族です。この挑戦を前にして引き下がることは、サレジオ家族から、ドン・ボスコが私たちに手渡してくれた精神から撤退するようなことです。

しかしながら、第一次福音宣教を何か最小限のもの、限定的なもの、何の痕跡も残さない‘無害なもの’と混同しないよう、注意しなければなりません。

ドン・ボスコはしばしば、すべては「やさしいカテキズムの教え」から始まったと振り返っていました。共に暮らした若者たちの人生と切り離すことのできないドン・ボスコの生涯は、「やさしい」ということが、決して「表面的な」という意味ではないことを、明らかに示しています。

---

7 フランシスコ、使徒的勧告 キリストは生きている *Christus Vivit*, 214.



「神の愛と、生きておられるイエス・キリストに出会う個人的体験」に関しては、しばしば若者自身が、共に歩む同伴者への宣教者、福音を告げる者になります。若者たちが、あかしを願い、真正で豊かな信仰を生きる生活を分かち合うからです。

ここに、ドン・ボスコの天才があります：ドン・ボスコは誰にとっても近づきやすい人であり続け、少年たちと共に、それ以下の目標ではなく聖性に直接焦点を合わせることを恐れません。

この過程で、魅惑的な、高きを求める領域が開かれます：それによって‘カテキズム’は、ただ単に初聖体や堅信の前に子どもや若者が受けなければならないコースにとどまらなくなります；それによって‘神学’は、ただ単に司祭に叙階される前に受けなければならない一連の試験にとどまらなくなります。カテケジスは、信仰に照らされた生活・人生の理解において、成長することです；神学は、イエスのうちに啓示された神の神秘の美しさのうちに、精神と心をもって分け入ることです。もし私たちがサレジオ家族として、この‘やさしい光’に惹きつけられ、心を奪われ、再びこれらの宝によって心と精神を養うなら、教育者・牧者としての私たちの生き方も、その光で照らされたものとなるでしょう。さらに、私は言いたいと思います。私たちはそのような心をもって、ほかの宗教を信じる、あるいは宗教を持たない若者や家庭と、共にあって共に生きることができるでしょう。私たちの姿勢は、真に分かち合い交流するもの、それぞれの宗教・信条への細やかな尊敬を素直にあかしするものとなるでしょう。

ヴァルドッコのオラトリオの初めのころのように、信仰における成長は、共に歩むことによってはじめて実現します：共に歩む同伴者自身の霊的歩みが深く密なものであればあるほど、若者、人々の霊的歩みも深く密なものになります。論理的なプロセスよりも、徐々に浸透、吸収することによって、若者、人々は同伴者の歩みについていくようになります。一方、牧者の役割を果たす人にとっては、司牧する人々の前進の歩みが自らを促し、泉に近づけさせます。主と出会うために、しばしば言葉に表されない願いをもって助けを求める人々の渇きに応えるために。

#### 1.4. 「良いキリスト者／キリストに倣う者」 - 真のサレジオの霊性を生きる

聖霊降臨で、聖霊は教会の時、使命の時を開始させました。聖霊のおかげで、霊性と使命は結ばれています。使命を霊性から切り離すことも、霊性を使命から切り離すこともできません。そのため、使命と霊性を統合的に生きることができなければ、きっと疲れや混乱が生じ、あるいは活動で人を‘楽しませる’ことで満足してしまい、一人ひとりの人生・生活に少しも深く‘触れる’ことができずに終わるといった状況が、私たちの戸口までやって来るとでしょう。

##### 初めの愛に戻る

今日、多くの社会学者が、‘人々が疲れている社会’について語っています。教皇フランシスコは、私たち司牧の働き手も疲れ切った状態にあるかもしれないと述べています。なぜこれほど疲れてしまうのでしょうか。私たちの予定がやるべきことではいっばいと言う人も

いるかもしれませんが……しかし、「この問題の原因は必ずしも忙しさではありません。むしろ、活動のしかたがよくないことによります。ふさわしい動機づけがなかったり、活動に行き渡ってやりがいをもたらす霊性がなかったりするのです。」<sup>8</sup> 明らかに、私たちの疲れの原因は予定表ではなく、私たち自身のうちに探すべきです：動機の不足や、使命と霊性の結びつきが失われていることのうちに。

この疲れを癒すには、原因をとらえなければなりません。初めの愛に戻るとき、再びいのちがよみがえります。ドン・ボスコもまた晩年に、ヴァルドッコのオラトリオが初めの愛を失っているのを目にしたことを、私たちは思い起こします。そこでドン・ボスコは、ローマから、少年たちとオラトリオのサレジオ会員にあてて手紙を書きました。ドン・ボスコはその手紙で、初めのころのいのち、喜びと、手紙を書いている時点の危機とを比べています。オラトリオでは、よろこび、いのち、信頼が失われていました。結論として、初めの愛に戻る必要があったのです。

## A. 霊性

確かに霊性という言葉は、今流行っています。しかし、この言葉が非常にあいまいなものであることも確かです。非常に多様なさまざまな場所や環境で、霊性への渴望が目覚めているのを私たちは見ることができます。昨今流行りの霊性・スピリチュアルな生き方の多くは、イエスとその福音と何の関係もないものですが。

このあいまいさにもかかわらず、霊性への渴望は、それを探し求める人にとり、キリストへの信仰を生きる戸口となりうることを認める必要があります。「ある若者たちには、神への探求心—啓示された神の輪郭をそのままに把握したいというものではないにしても—があることが見て取れます。他の若者には、兄弟愛への、決して弱いものではないあこがれがあるのが分かります。世界に何らかの貢献をなすため、自分の才能を伸ばしたいという確かな願いが多くある若者にあるようです。ある人には、特別な芸術的感性が、また、自然界との調和への希求が見られます。別の人たちには、コミュニケーションに対する強い意欲があるようです。そうした人たちの多くが、違った生き方への強い望みを抱いているように思います。これらが真の出発点であり、刺激、光、励ましとなることばに開かれて待つ、内なる力なのです。」<sup>9</sup>

この開かれた姿勢から、私たちは自問するようになります。私たちはサレジオ家族として、“探し求める”若者や大人のために、何をしているだろうか。私たちは、いづらか光をもたらし、力づけることができます。このことは、特に宗教的なしるしやシンボルが生き生きとした力と意味を失ったような状況において、緊急な課題です。そのような状況は、今やあらゆるところに見られると言えますが。探し求めている人と対話できるということは、人間関係の橋を築くということです。これは教皇が次のように語るとき、願っていることかもしれません。「神父や司牧者、青年指導者になるよう召し出されている人の洞察力は、燃え続けるわずかな炎を、折れそうできて折れてはいない葦（イザヤ 42・3 参照）を見いだすところにあります。それは、ほかの人には壁しか見えないところに道を見いだす力、ほかの人に

---

8 フランシスコ、使徒的勧告、福音の喜び *Evangelii Gaudium*, 82.

9 フランシスコ、キリストは生きている *Christus Vivit*, 84

は危険でしかないところに可能性を見いだす才覚です。これこそ、若者の心に蒔かれたよい種をよいものと認め、育てることのできる、御父である神のまなざしです。ですから若者一人ひとりの心は『聖なる土地』であり、神のいのちの種を宿すものだと考えなければなりません。神の神秘に近づき、それを深く究めるためには、その前で『履物を脱ぐ』必要があるのです。」<sup>10</sup>

そして、愛する父ドン・ボスコが少年たちと親しい関わりを築き共に歩んだそのスタイル、方法を、私たちはこのアプローチのうちに明らかに認めます。

## B. キリスト教の霊性

霊性という幅広い領域の中でも、私たちはキリスト教の霊性のうちにあります。福音の本質的メッセージから生まれる基本的なキリスト教霊性があり、教会の歴史のそれぞれの時を最も特徴づける価値も、そこに刻まれます。キリスト教は歴史に受肉したものであり、実際に生きている人々を、それぞれの文化的状況の中で変容させようとするものであることを、私たちは忘れてはなりません。したがってキリスト教霊性は、それぞれの時代の必要に応え、その時代のカテゴリーに即して自らを表現する必要があります。そして確かなのは、福音からあふれるこれらの価値が、あらゆる状況、あらゆる文化、あらゆる時代において、コミュニケーション、対話、他の宗教との出会いの、非常に貴重な橋になるということです。

霊的生活における決定的な点は、この世において、私たちの生活・人生のうちに、神の神秘を見いだすことです。なぜなら「神はこの世の歴史のうちに、生活・人生の出来事のうちに、私が出会い、私に語りかける人々のうちに働いておられる」<sup>11</sup> からです。ここに、私たちは識別の基礎を見いだします。なぜなら神は無為ではおられず、働いておられ、教会の使命は、すでに現存される方であり、一人ひとりの生活・人生のうちに、心のうちに働いておられる主と、男性、女性、すべての人が確かに出会えるようにすることだからです。使命をこのように理解し、**青少年司牧は、歴史のうちに、一人ひとりの生活・人生のうちに、心のうちに働いておられる神の神秘に出会うよう、一人ひとりの子ども・若者を助けることを目指します。**

ドン・ボスコは常に、神の視点から人生の出来事を解釈することができました。神のみこころに即して生きるには、その人に生き方の統合をもたらす霊的な中核が必要です。霊的な人とは、聖霊の働きによって築き上げられ、統合され、造り上げられた人です。その意味で、霊的な人は、自分が神の子であることを意識しています。信仰の知識があり、それによって神の神秘を、この世と歴史の意味をとらえることができ、神の国に仕える兄弟姉妹の共同体の中で信仰を生きます。

これまでに述べたことは、教皇フランシスコが教導において霊性を特別に重視していることを受けとめ理解する助けになるでしょう。教皇は、すべての主要な文書で霊性を取り上げています：

---

10 同, 67

11 フランシスコ, 2019年10月28日, お告げの祈り

- 宣教する弟子の靈性<sup>12</sup>
- 自然環境と共に生きるエコロジカルな靈性<sup>13</sup>
- 結婚と家庭の靈性<sup>14</sup>
- 靈的生活の起源であり、到達目標である聖性<sup>15</sup>

教皇フランシスコは述べています：「わたしはあなた方が、自分を大事にし、真剣に考え、自分の靈的成長を目指すことを期待しています。」<sup>16</sup> なぜなら、明らかに、靈性は人生・生き方に影響を及ぼすからです。夢、経験、人間関係、計画や選択から成る人生・生き方です。私たちは、若者を力づけることができなければなりません。恐れずに夢を描き、選択を行うよう；充実した生き方をし、物事に挑戦するよう；イエスとの友情を味わうよう；成長し、成熟した人間となるよう；兄弟愛を生きるよう；物事に責任をもって取り組むよう；恐れずに福音を告げるよう、助けることができなければなりません。

### C. サレジオ靈性

サレジオ靈性は、キリスト教靈性という‘大河’の中の、一つのカリスマの表れです。いわばキリスト教靈性が名詞であれば、具体的なカリスマのスタイルはその形容詞になります。

サレジオ靈性は、ドン・ボスコの靈的体験をよく理解することなしには理解できません。私たちの父は、青少年の教育と福音宣教に自らをささげた司祭でした。青少年のためのさまざまな使徒的運動の創始者、明確で力強い使徒的靈性を持つカリスマにおける家族の父でした。

そのため、サレジオ靈性は、ドン・ボスコが生きた靈的体験、最初のサレジオ会員たち、最初のサレジオ・シスターズ、オラトリオの協働者や少年たちが生きた靈的体験に根ざすものです。この靈的伝統のうちに、キリスト者の生き方の理解の仕方；教育的、司牧的、社会的な活動；私たちが予防教育法と呼ぶ、教育的、靈的な提案を見ることができます。私たちの靈性は、いくつか固有の特徴があります。日常生活の靈性であり、喜びと楽観的な精神を生きる復活の靈性、イエスとの友情と親しい絆の靈性、教会の交わりの靈性、マリア的な靈性、ドン・ボスコがそうしたように、「良いキリスト者、誠実な市民」になるという目標を常に提示する、責任ある奉仕の靈性です。私たちはすべての人一人ひとりの尊厳と権利の促進に努めます；家庭では惜しみない広い心で生活するよう努力し、特に最も貧しい人々との連帯を促進します；誠実に能力を発揮して自分の仕事に取り組みます；政治においては正義、平和、共通善を促進します；神の造られた世界、自然を大切にし、文化を培います。このすべては私たちの靈性を、私たちがサレジオ家族であることを形作る要素であり、実に多様な世界のさまざまなところでドン・ボスコのカリスマによって告げられる、福音のメッセージなのです。

12 参照 フランシスコ、福音の喜び、239-288

13 参照 フランシスコ、ラウダート・シ、181-213

14 参照 フランシスコ、愛のよろこび *Amoris Laetitia*, 278-289

15 参照 フランシスコ、喜びに喜べ *Gaudate et Exsultate* 内容のほぼ全般

16 フランシスコ、キリストは生きている、159

## 1.5. 「良いキリスト者／キリストに倣う者」 - キリスト教でない社会、信仰やキリスト教が過去のものとなった社会の挑戦を前にして

他方私たちは、信仰を持つ若い人だけでなく、信仰から離れて行っている若者、ほかの宗教を信じる若者、何も信じていない若者と出会う世界に暮らしています。

状況のこの多様性は、聖霊降臨のときに受けた宣教の任務を思い起こさせます。「イエスはどこにわたしたちを派遣するのでしょうか。そこには境界も限界もありません。すべての人のもとにわたしたちを派遣します。」なぜなら福音には、境界も限界もないからです。主はすべての人に私たちを遣わされ、サレジオのミッションは私たちをすべての人のもとへ運びます。「行って、あらゆるところ、それも社会の周縁、遠く離れた人、わたしたちに無関心であるように思われる人にまでキリストをもたらしことをおそれてはなりません。主はすべての人を捜し求めます。すべての人がご自分のあわれみと愛の温かさを感じることを望まれます。そのかたはわたしたちに、おそれることなく、宣教する者のメッセージを携えて進みなさいと呼びかけておられます。どこにいても、だれにいても、近所で、学びの場で、スポーツを通して、友人と出掛けているときも、ボランティアをしているときも、仕事でも、いつだって、福音の喜びを分かち合うにふさわしい機会なのです。」<sup>17</sup>

そのため、宣教の使命は、私たちに多くを要求するものですが、同時に私たちに触発するものなのです。信仰と距離を置く若者たち、またほかの宗教を信じる、あるいは何も信じない若者たちにも、司牧レベルで近づくために、私たちは何を考える必要があるでしょうか。言い換えれば、キリスト教でない、またはキリスト教を過去のものとする環境で、何を考えなければならぬでしょうか。

### 私たちに脅かす危険

私たちはキリスト教の環境でも、キリスト教でない、あるいはキリスト教を過去のものとする環境でも、原理主義と相対主義のいずれをも、そして同様に、排他主義と混合主義のいずれをも避けなければなりません。

自分の懐<sup>ふところ</sup>にこそ真理があると信じる原理主義は対話に扉を閉ざし、その信条において揺るぎなく妥協しませんが、反動的で非寛容な姿勢を取ります。他方、相対主義は、確かなこと、認識できる真理、絶対的な規範は何も無いという確信から出発します。ポストモダンの文化の風潮は、相対主義のうちに自然な居住環境を見だし、何かを真理とするいかなる主張も、受け入れることのできない攻撃と見なします。原理主義も相対主義も、私たちの司牧計画においては何の役にも立ちません。

最近の若者のシノドスの討議要項は興味深い点を指摘しています。「それは、この世の精神に合わせるためにキリスト教の最も貴重な特質を手離すことではなく、そうするようにと若者が求めているわけでもありません。しかし、キリスト教のメッセージを、変化した文化

---

17 同, 177

的状況において伝える方法を、私たちは見いださなければならないのです。聖書的伝統に則し、真理が関係性の土台を持つことを認めるのは良いことです：人間は、それを神からのものとして体験するとき、真理を見いだします。神は、頼ることのできる、信頼に足る、唯一の方です。」<sup>18</sup> 討議要項は、関係性の道こそたどるべき道であり、関係性の司牧に力を入れるよう提案しています。関係性を育むことが、通るべき門であると私たちに言っているようです。ドン・ボスコの予防教育法が、常にこの関係性の原則の具体的な実践であったことを、私たちはよく知っています。

さらなる二つの危険は排他主義と混合主義です。一つ目の排他主義には二つの顔があります。一つは、最もよく養成された若者や大人、少数精鋭の人だけを対象に提案を差し出すことです。二つ目は、各人の立場を尊重するというを理由に、いかなる司牧の提案も拒絶することです。結局、少数の人のためだけの司牧提案になるか、司牧提案が全く無いか、どちらかになってしまいます。このどちらの道もよくありません。私たちの司牧提案が遠く離れている人々に関心を向けられないなら、それは、私たちが福音の計画をあまり信頼していないことの表れであり、もしかすると、私たちの司牧の考え方がエリート主義に陥っているということでもあるかもしれません。そして、もし私たちが、提案を拒絶し沈黙させることを選ぶなら、やはり福音の計画にわずかな信頼しか置いていないということになるでしょう。沈黙させることは、誰とも司牧的関わりを持たずにすむ最良の方法になります。

コインの反対側の面は、混合主義です。混合主義的な司牧計画は、さまざまな世界観から少しずつ取ったものを混ぜ合わせるのが特徴です。混合主義的な司牧は、いつも新しいことを求めながら、何ら識別の基準を用いようとしません。

では、何らかの有効な提案はあるのでしょうか？ はい、あります：

### → み言葉の種を育む

最初の提案は、み言葉の種を見だし、その世話をするというものです。第二バチカン公会議はこの教えを奨励しました。実際、この教えは何世紀も続いてきた伝統に基づくもので、すでに2世紀に、教父聖ユスチノが説いた教えです。

公会議はこの教えを思い起こしながら、さまざまな宗教的、文化的伝統のうちにある多様な段階の真理を認識するよう提起しました。その種の中に、まだ胚のような形ではあるものの、み言葉はすでに存在し、完成へ向かっています。このことは、キリスト教でない、あるいはキリスト教を過去のものとする社会での私たちの司牧活動に、大いに助けになります。そのような場では、相互理解と協働のための適切な機会を見いだすように努めることを私たちは求められているのです。そのような‘出会いの場’を、人としての価値観、人間の尊厳、平和の探求、他者への共感、他者の尊重といった徳を身につけること、被造世界を大切にす環境問題などのうちに見いだすことができます。

ここに挙げたいずれの問題も非常に大切であり、昨今、世界規模で社会の意識が向けられています。そして、より身近なことから始めることができると私たちに教えてくれるのです。

---

18 司教シノドス、若者、信仰、そして召命の識別、前掲書、55

## → 対話

キリスト教でない、キリスト教を過去のものとする環境での二つ目の司牧的提案は、対話でなければなりません。ここで、関係性というテーマの考察に戻しましょう。

私は対話の重要性を強調します。対話にはほかの能力も必要です。耳を傾けられること、相手が理解できるように話せること、交わりの体験を差し出せることなどです。対話は、自分の意見を述べるだけでは成り立ちません。対話に入ったなら、相手が生きている体験や相手の考えを理解するために、大きな努力を払う必要があります。したがって、否定しえない違いを前にして尊敬の雰囲気や常を育むこと、また、自分の限界を認める謙遜と、自分の良い点を理解する自信が対話には必要であると認識することが大切です。

私たちがここで言う司牧的対話は、何よりも、人間のいのち・人生についてのやりとりです。若者への開かれた姿勢をもって、若者たちの喜びや悲しみ、願いや希望、宗教的価値観を分かち合うやりとりであり、私たちがとても豊かにする個人の、また共同体での出会いの実践です：「このようにして、あり方、考え、表現が異なる他者を受け入れる姿勢を身に着けるのです。それによって、あらゆる交流の基準であるべき正義と平和に奉仕する義務とともに引き受けることができるのです。」<sup>19</sup>

## → あかしの価値

もう一つ、等しく大切な視点は、「あかし」に関わるものです：一貫性、献身、信頼性に基づくあかしの価値です。若者は、私たちの多くの失敗をゆるしてくれますが、私たちが一貫性のある、信頼できる生き方をし、他者のために献身する者であることを望んでいます。それがこの時代のあかしです。

## → 福音を宣べ伝える

教皇フランシスコは、福音を宣べ伝えることの重要性を、繰り返し思い起こさせます。「主であるイエスを明確に告げ知らせないなら、本当の福音宣教はありません。あらゆる宣教活動においてイエス・キリストを告げ知らせることが何にも勝っているのです。」<sup>20</sup> 福音宣教は決して信仰の押し売りになってはいけません、そしてそれぞれの環境で多様な表現があるでしょう；例えば、キリスト教でない社会で行う福音宣教は、キリスト教を過去のものとする環境での福音宣教とは異なるでしょう。

この福音宣教は、本質的に、キリスト者にとっての三大真理を含みます：神は私たちを愛しておられる、キリストは私たちを救われる、聖霊はいのちをあたえ、人生を共にしてください、という真理です。

このことをどのように宣べ伝えたらいいのでしょうか。何よりも、福音が差し出されるとき、聖霊の恵みによって信仰の目覚める機会が開かれていると知る確かさをもって、宣べ伝えます。さらに、寄り添う親しみやすさという特徴的なスタイルで宣べ伝えられるべきで、またグループや共同体の中であっても一人ひとりに目を注ぐものであるべきです。すなわち、

---

19 フランシスコ, 福音の喜び, 250

20 同, 110

一人ひとりに届いて触れるものでなければなりません。どのような情報・資料、司牧戦略も、その代わりにはなりません。

「ただ、心の中でキリストを主と崇めなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を求める人には、いつでも弁明できるよう備えていなさい。それも、優しく、敬意をもって、正しい良心で、弁明しなさい。」（1ペトロ 3・15-16a）

## 1.6. 「良いキリスト者／キリストに倣う者」 - 自己に執着しない人

宣教の使命は、主の弟子の特性です。教皇フランシスコが使徒的勧告『福音の喜び』で宣教する弟子の霊性の特質について語る時、宣教の任務を人間存在の内奥に位置づけていることを、思い出しましょう。「わたしにとって民のただ中での福音宣教とは、生活の一部でも、取り外せる装飾品でもなく、人生の中の付録でも、ちょっとした時間のことでもありません。それは、わたしという存在から、それこそ自己破壊を望むのでもなければ取り除くことのできないものです。わたしはこの地上に派遣されているのです。そのために、わたしはこの世にあるのです。」<sup>21</sup> 教皇は宣教の使命を、存在の中心に置いているのです。

### a. 他者のためのあなたのいのち

神との出会いによって、私は自分の殻から引き出され、他者へと向かうようになります。これを「贈りものの人間論」と呼ぶ人もいます。「他者のためのあなたのいのち」という言葉に要約できるものです。したがって、他者に心を開いている人は、無関心ではなく、相手に関心を向け、共感に満ちたまなざしを持つ人です。無関心は、昨今、多くの人の心の奥に巣食い、そのため私たちは、他者の叫びを前にしながら共感を覚えることができなくなっているのです。

また、他者に開かれた人は、自分の頂いている賜物を認識することができ、自分の能力を他者への奉仕のために用います。他者、特に最も助けを必要とする人々に献身することは、こうして真の信仰の実践となり、すべてのキリスト者の生き方の土台なのです。

「神と会うことを『恍惚』と呼ぶのは、神の愛と美のとりことなって、自分が自己から引き離されて高みに上げられるからです。ですがわたしたちは、一人ひとりの中に秘められた美、尊厳、神であり御父の子であるかたの似姿としてのすばらしさに気づくことでも、自己から引き離されうるのです。聖霊はわたしたちが、自己の外に出るよう、愛の心で他者を抱きしめ、その人の幸せを追求するよう、駆り立てておられます。」<sup>22</sup>

### b. 「私」から、「私はここにおります」へ

他者に開かれたものという、このいのちの理解は、「私」から「私はここにおります」へと前進するよう、私たちを招きます。「私」の文化は、私たちの暮らすこの世界をよく説明するものです。この文化は多くの可能性（個人の成長、自立、発展）を差し出しますが、多

---

21 フランシスコ, 福音の喜び, 273

22 フランシスコ, キリストは生きている, 164



くの弱さを隠すものでもあります（人々が互いに距離を取り、相手に開かれていない、自己愛のうちに閉じこもっている）。

聖書的人間論は、信じる者を、「私はここにおります」と言うことのできる人として示します。私たちは聖書の中で、アブラハム、モーセ、サムエル、イザヤ、ナザレのマリア、イエスご自身の人生の重要な時に、この言葉が語られるのを見ます。ヘブライ人への手紙によれば、イエスはこの世に来られたとき、「御覧ください。私は来ました。神よ、御心を行うために」（ヘブライ 10・7）と言われました。

当然のこととして、「私」に価値を見いだしながらも、キリスト者の生き方が「私」から「私はここにおります」へと向かう旅であることを私たちは理解できます。私たちはこの旅を歩むことによって、私たちを超える神秘に自らを開くことができるようになります。信仰をもって「私はここにおります」と言うとき、私たちの内に、ある姿勢、資質が形作られています。それは、導き同伴してくださる聖霊に向けて、人間として最も豊かに満たされる在り方、生き方を見いだすため、私たちの存在を開かせます。それはあらゆる召命の本質です。信じる者のまなざしはイエス・キリストに注がれます。「イエスがわたしたちにくくださる人生は愛の物語であり、わたしたちと溶け合いたい、各人の地に根づきたいと望む、いのちの物語です。」<sup>23</sup>

## 2. 誠実な市民／社会人

### 2.1. 若者は「いのちの家」で私たちが待っている

私たちができるサレジオのミッションの最良の、今日的に最も意味深い解釈の一つは、若者のいる所で、暮らしている状況の中で彼らと出会うという私たちの選択を確かなものにする事です。若者は私たちが待っています。そして私たちが彼らと出会わなければならない場合は、若者の日々の、ふだんの日常生活です。出発点は若者、家庭、すべての人一人ひとりがいるところだということを認識しなければ、人間の成長も、社会的取り組みも、福音宣教と信仰の歩みも、ありえないでしょう。

ドン・ボスコから学び、出かけて行って若者、人々と出会えるということは、私たちが若者、人々の人生に心を向けていることのしるしです。人々の状況を真剣に受けとめ、何よりも彼らの味方になり、その関心事を自らの関心事としたいという本当の望みのしるしです。そのため、私たちは、若者たちのいるところで彼らと出会い、若者たちと共に、まさにその場で、常に挑戦である状況を改善し、変容させるために献身して働くという、サレジオ家族としての創立のカリスマを忘れることができません。最終的に、人間的成長のあらゆる歩みは、それそのものが目的なのではなく、自分の生活・人生を他者との出会いの場とするよう人を導く、より深く幅広い向上の歩みの一部としてとらえなければなりません。私たちの内

---

23 フランシスコ, キリストは生きている, 252.

に、イエスの良い知らせの規範があるなら、すでに地上で築かれ始める天の国の前触れとして、賜物を分かち合い、すべての人のためにより正義に適った、尊厳ある社会を築くために。

社会的な取り組み、若者や社会の善益を促進するさまざまな組織の‘闘う姿勢’が福音の教えと矛盾するというような考えを、私は受け入れなければならないとは思いません。私たちは主の祈りに、兄弟愛と正義、連帯、和解、他者の尊重、平等、最も弱い人々の擁護の‘政治’を見いだすことができます。良いことを行うさまざまな方法が互いに矛盾するとは、言うことができません。良いこと・善が、全人的に人をとらえ、あらゆる差別や偏りを避け、すべての人のためであれば十分です。

「我々の仲間でない」人々のことを伝えられたイエスは、即座に答えながら、ご自分に直接反対しない人々をご自分の仲間とされました。私たちに反対しない人たちは、私たちの側にいるのです。

## 2.2. 「誠実な市民／社会人」 - 市民としての在り方、社会への責任ある取り組みの教育

ドン・ボスコの政治は「主の祈り」の政治だったため、例えば、ドン・ボスコは政治にかかわらなかつたと言うようなとき、もしかすると私たちは、都合の悪い質問を避けるために逃げ込むことのある、陳腐な決まり文句を前にしているのかもしれませんが。確かに、私たちがどのような政治について取り上げているのか、はっきりさせなければなりません。

この話題を考察し、政治の分野に「主の祈り」の考え方をもたらすことは、人々にとっての関心事、人々の生きている状況への人間的、福音的な責任を確認することなのだと言見すること、それは意義のあることです。そして主の祈りを、‘この世の事柄’に無関心な、空しいスピリチュアリズムに矮小化し、それに別の意味を与えてしまうのではなく、人間の、すべての子らの善と幸いを求められる神を示すべきです。

今日の若者は、実際的なこと、楽に結果が出ること、自分の行動の効果がすぐに見えることに慣れ、計画やプロセスに取り組もうとする際、あるいは種を蒔く苦労や実りを見るまで長く待つことを受け入れる際に困難を経験しますが、社会への責任を彼らに教育することは不可欠なのです。その教育は、若者の多くをキリスト者の道／キリストに倣う道へと招くことのできるものです。

社会への取り組みなしには真正なキリスト者の生き方はないと言えるでしょう。言い換えれば、正義と愛徳なしに、他者への、特に最も助けを必要とする、最も弱い、「声なき」人々、見捨てられ、脇に追いやられた人々への奉仕なしに、真正なキリスト者の生き方はありません。助けを必要とする人なしに善いサマリア人は存在せず、貧しく、見捨てられ、危険にさらされた若者なしにドン・ボスコも存在しないのと同じように。

他方、人間性の向上なしに真の政治的、社会的な行動はありえません。社会的、政治的な行動は、人々の向上、人間性の向上が社会において優先されることの表現でなければなりません。

一部の人々が大きく強調することのある、聖性の道（霊的生活）と社会への責任・取り組み（市民／社会人としての生活）という二分法は、労働の尊厳とそれを通してのキリスト者としての成長、行いに表れる信仰、貧しい人々のための、また社会正義のための取り組みが、福音に一致する体験として目標となる時、具体的に実現されるでしょう。

社会的次元は、信仰の体験の外にあるものではありません。まさに社会的取り組みのうちにこそ、あらゆる人間活動の超越的次元をより豊かに深めさせなければならないのです。教皇フランシスコは『キリストは生きている Christus Vivit』の中で、社会に関わることのできる若者の力について、興味深い解釈を示し、キリストとの友情のうちにあますところなくいのちを生きることから、この献身が生まれるとしています。

「こうした社会参加を奨励したいと思います。わたしは知っているのです。『あなたの心、若い心は、よりよい世界を築きたがっています。世界中のニュースを見ていると、世界の多くの場所で、多くの若者が、もっと正義と友愛のある文明への望みを表明して、通りに出ています。街頭に出る若者たちです！ 変革の主役になろうという若者たちです。変革の主人公を、ほかのだれかにやらせてはなりません。未来はあなたたちの手にあるのです！ あなたたちを通して、世界に未来が訪れるのです。あなたたちには、この変革の主役にもなってほしいのです。世界のさまざまな場所で生じている社会的・政治的不安に対して、無関心を克服して、キリスト教的な答えを示してください。あなたたちをお願いします。未来を築く建設者になり、世界をよりよいものとする働きに加わってください。愛する若者の皆さん、お願いします。観客席から人生を眺めるのではなく、参加してください！ イエスは観客席にはおられず、積極的にかかわられました。ですから観客席からの人生ではなく、イエスがなさったように、人生の中に飛び込んでください。』何よりも、消費主義や薄っぺらな個人主義の病に陥ることなく、何らかの方法で、共通善のために闘い、貧しい人に仕える者となり、愛と奉仕の革命の主人公となってください。」<sup>24</sup>

### 2.3. 「誠実な市民／社会人」 - 政治的な奉仕の責任の教育

「ドン・ボスコが思い描いた社会は、倫理と宗教という土台の上に築かれた、キリスト教的な社会でした。今日、社会のとらえ方は変わっています：平等、自由、参加の理念の上に築かれた世俗社会に私たちは暮らしていますが、自らの社会的、職業的、政治的な責任を自覚する市民、最も弱い立場に置かれ、疎外された人々への特別な配慮と関心をもって、正義と共通善の促進のために働くことのできる市民を育成する力を、サレジオの教育的提案は保ち続けています。したがって、規範の変革、人生のビジョンのために、他者に心を開く文化、節度のある生活、一貫した惜しみない自己贈与の姿勢の文化、正義とすべての人のいのちの尊厳を擁護する文化のために働く必要があります。」<sup>25</sup>

現代の多くの社会政治構造が‘ゲームのルール’に守られながら、私たちが信じられる、あるいは信じたいと思うよりはるか以上に市民をコントロールし、あるいは抑えている

24 フランシスコ、キリストは生きている、174

25 パスクアーレ・チャーベス、予防教育法と人権に関する国際会議文書 *Acts of the International Congress on the Preventive System and Human rights*, p. 82

ということは事実です。私たちの教育機関は、責任ある政治的姿勢で、市民として関わる姿勢で、そのような状況に応じるよう、若者を育成する必要があります。私は自分自身に問いかけます：

→ 市民としての権利を効果的に、自由に、一貫性をもって発揮するため必要な知識、能力、技能、本質的な姿勢を身につけるよう、私たちは若者をどのように助けたらよいだろうか。

→ 今日、サレジオ家族として、共に責任を担うサレジオ的な市民に、どうしたらなれるだろうか。

社会がもろく、断片化したこの時代、生活の政治的次元がしばしば腐敗を黙認する道徳の欠如と結びつき、特に個人主義に走る無気力が蔓延する中で、私たちは、政治・社会の分野で「誠実な市民／社会人」として奉仕する教育を、若者のために掲げるべきです。

何千とある政治理論（経済的、社会的、教育的、保健的、国際的など）のうち、正義と愛を目指す健全な政治理念が必要とされる中、私たちはサレジオ家族として、「主の祈り」の、「日ごとの糧」の、最も貧しい人々の「いつも」の「裸足」の、（マルコ 14・7）理論を選ぶことができるでしょう。私たちは‘政治的非主流 politically incorrect’の側にいたいと願い、そうあり続けます。なぜなら、私たちは声なき人々の側にいることを選ぶからです。ロメロ大司教はすでに言っています：「信仰の政治的次元は貧しい人々への具体的な奉仕を通して見いだされなければならず、そのようにしてまさに見いだされるのです。（…）それは貧しい人々の世界に受肉され、良い知らせを告げ、希望を与え、自由をもたらす歩みへと勇気づけ、人々の権利を擁護し、運命を共にするものです。」<sup>26</sup>

したがって、教育者として、キリスト者として、今日のドン・ボスコのサレジオ家族として、私たちは、社会的な政治活動の形を目指します：連帯、人類の兄弟愛に貢献する活動、今、ここに「神の国」を築きながら、他者を受け入れ大切にす、真の出会いに貢献する活動です。

生きることの理由であり政治に関わる歩みの目的である、政治参加のこのビジョンと規範をもって若者を教育することは、次の揺るぎない確信をもって教育することを意味します：

- ✓ 人の尊厳と権利。共同体と個人のより大いなる善を常に目指しながら；
- ✓ 神の似姿に造られた人間の超越的な尊厳を擁護し、守ること；
- ✓ 全人的で、すべての人に行き渡る、包括的な、持続可能な開発の促進；
- ✓ 愛徳、連帯のグローバル化。無関心、排除、利己主義の巨大な重圧に立ち向かう、特に貧しい人々、弱い人々、疎外された人々との連帯；
- ✓ 経済秩序を、また人々の持つあらゆる可能性の開発を規定する理念としての、兄弟愛の実現；
- ✓ すべての人が声を上げ、参加することのできる民主的社会を土台として、自由で責任ある参加の表れとして支援の絆の輪を広げる；

---

26 オスカル・ロメロ大司教, 1980年2月2日, ルーヴァン大学の名誉博士号を受けた際のあいさつ

- ✓ 出会いと分かち合いの文化として、地球資源を分かち合うこと；また、共に暮らすための自然的、人間的エコロジー、調和、平和、今そして未来の健全で幸いな生活に配慮しながら、共に暮らす家を大切にすること。

このことは、男性、女性、一人ひとりのうちに人間の心を目覚めさせ培う教育を私たちに求めるものです；自らの召命、尊厳、招かれている目的地の意識において、一人ひとり成長させる教育です；社会生活への参加から身を引かないように、善を求める熱意に満ちて、未来のための決定が行われる場に、カリスマを発揮して参加するように、‘政治の新世代’にも及ぶ教育の働きです。

教皇フランシスコが言うように：「人類の未来は、政治家や影響力を持つリーダー、大きな企業などの手にだけあるではありません。そう、彼らには大きな責任があります。しかし、未来は誰よりも、他者のうちに一人の人を見、自分が『私たち』の一員であると認識する人々の手の中にあるのです。」<sup>27</sup> 沈黙を超え、無関心を超えて歩みたいと求める「私たち」です。この時代の市民、私たち皆一人ひとりが、共同体の中で使命を果たすことができるように。

このようなものの見方は本質的に、私たちがサレジオのカリスマと見なすものとあまり違いありません。その例として、サレジオの青少年司牧の枠組みに次のようにあります：「愛徳の社会的次元は、正義の実現のために、より正義に適う、より人間らしい社会を築くために、社会的、政治的に取り組む人を教育することのうちにあります。愛徳の社会的次元のうちに、あますところなく福音的なインスピレーションを見いだしながら。」<sup>28</sup> そして同様に、私たちの大きな家族に属するさまざまな会の多くの文書に、この考え方が見られます。

リミニのオラトリオの若者、福者アルベルト・マルヴェッリは、このすべての模範でした。マルヴェッリは、政治を奉仕として、この世で、人々の暮らす社会 ‘polis’ で信仰を表す方法としてとらえ、政治に関わりました。彼は、当時の教会が教え、社会教説を読んだおかげで知っていた連帯と正義の理想を自らの生き方のうちに具体化しようと思いました。マルヴェッリにとり、政治は愛、社会的愛徳の結実、真理の道具でした。列福の際の説教で、聖ヨハネ・パウロ二世はマルヴェッリについてこのように述べています：「彼は祈りのうちに、政治活動のための照らしをも求めました。歴史を救いの歴史へと変容させるために、歴史のうちにある神の子として人生をあますところなく生きなければならないと、確信していたのです。」この世を変容させるため、信仰と生活が統合された行動のための、社会 - 政治的取り組みの学び舎で教育された青年でした。アルベルトは、市民として他者に奉仕することの意味を、自らの生活・生き方の中でよく理解していました。

そのため、引き続き欠かすことができないこととして、「ドン・ボスコによる『社会 - 政治 - 教育的選択』の現代的な再確認に向けて前進しなければなりません。このことは、何らかの政党の目的に結びついた、ある種のイデオロギーに基づく活動主義を進めるということではなく、社会・政治的意識を養い、それによって、不可侵の人間的・キリスト教的価値と権利に絶えず立ち戻りながら、自らの生き方を社会の共通善のために働く使命とするように若者を育成するということです。」<sup>29</sup>

---

27 フランシスコ, 2017年4月26日, TED へのビデオ・メッセージ

28 サレジオ会青少年司牧部門, *Salesian Youth Ministry Frame of Reference* (サレジオ会青少年司牧の枠組み), p.145.

29 P. Chávez, *ACG 415. Like Don Bosco the educator*, ストレンナ 2013 「教育者ドン・ボスコのように」

これは、若い世代の社会 - 政治教育における挑戦であり、私たちはそのためにさらに成長しなければなりません。「今日、誠実な市民であることは、若い人にとりこれらの側面に取り組むことを意味します：あらゆる状況において、人間の尊厳と権利を促進すること；家庭では家族への惜しみない心で生活すること。相互的な自己贈与を土台として、自らの家庭を築くことに向けて準備しながら；連帯、特に最も貧しい人々との連帯を促進する；誠実さと専門的スキルをもって仕事において成長する；政治において正義、平和、共通善を支持する；神の造られた世界を大切にし、文化を促進すること。」<sup>30</sup>

教育はそれ自体のうちに政治的な次元を持っています：教育活動は、世界への一種の介入です。このことは、教育の政治的次元、市民としての生き方の政治的次元、社会への、若者たちの家庭、若者自身への責任・取り組みの政治的次元に、より目を向け配慮することを意味します。

このことは今日、そしてこれからも常に、教育者としての私たちにとって、新たな倫理基準を生み出す社会を可能にするという、大きな挑戦となります。したがって、私たちの教育事業が卒業生を生み出しても、変革に取り組む市民を生み出さないなら、私たちは満足することができません。さまざまな現実に対して批判の目を持ち、ただ「教育」受けたというだけでなく、変革と向上、希望と刷新の担い手として、経済、政治、教育、職業、社会的取り組み、マスメディアなど世界から、それらの現実を「変容」させる力をつけた市民を生み出さないなら。共通善のために働く、積極的に関わる市民から成る新しい世界のために。サレジオ家族の教育者として、奉獻生活者、信徒である私たちは、確信をもってこの道を歩み続けなければなりません。種が植えられたならば、それが時とともに成長し、人生を歩む姿勢、生き方となるように。

#### 2.4. 「誠実な市民／社会人」 - 人としての道義、社会規範の教育

誠実な社会人の養成において若者を教育し共に歩むことを考えるとき、私たちが自らに問うのを避けられない問題があると思われまます。働かずにあるいは専門知識を利用して金を儲ける、安易な道を行く誘惑を乗り越えることのできる誠実な社会人を育てるために。

→ 十代の若者や青年が、正直さと人間としての道義にのっとなって決断し、生活・人生の問題を解決できるよう、日々出会う彼らを私たちはどうしたら助けることができるでしょうか。

→ 自信を養うように、同時に自らの行動が良心に照らして正しいかどうかを認識できるように助ける体験を、どうしたら若者に提供できるでしょうか。

人を自由にする真理、透明性のすばらしさのうちに、二重生活や自己欺瞞なしに、人を押しつぶすさまざまな隷属の構造や、人の内的自己を弱らせる道義に反する非倫理的な応答に陥ることなく生きるよう、私たちは教育できなければなりません。イエスご自身、人々に教えられたとおり、人として正しく、透明性をもって生活されました。囚われ人を解放し、目の見えない人に光を、抑圧された人に自由を回復させ、主の恵みの年を宣言されながら（ルカ 4・18-19 参照）；他者への奉仕の模範として弟子の足を洗い、すべての人の前で十字架にかけられ、いのちの代償を払われた、愛と真理の「汲みつくせない豊かさ」を生きながら。

---

30 サレジオ会青少年司牧部門, *Salesian Youth Ministry Frame of Reference* (サレジオ会青少年司牧の枠組み), p. 107, 第 23 回総会文書, n. 178 に触れながら。

イエスはご自身の身をもって、構造的な不正義に苦しめられました。エゴイズム、自己中心、自らの利害の追求、何度も繰り返されるうちに“真実”となり、人殺しにまで至る嘘によって腐敗した不正義です。

私たちは教育者として、人としての誠実さと社会規範を実践し、勧めなければなりません。それはどのようにしてできるでしょうか。予防によってです。昨今、‘シレネの声’（訳注：シレネ=ギリシャ神話の妖精。歌声で誘い、船を座礁させる）の聞こえてくるのがよくあります。内面の良心を腐敗させ、人としての正しさ、人としての私たちの強さと真理を損わせる安易な道をたどることを、全く自然なことだとそそのかす声です。「社会全体は、さまざまな形の腐敗という癌と具体的に闘うよう、招かれています。……腐敗は、社会という織物の最も深い傷の一つです。倫理的また経済的な両方の観点から深刻な損害を与えるからです；そこには手っ取り早く簡単に利益を得られるという幻想がありますが、実際は、社会の構造全体から信用、透明性、信頼性を失わせ、皆を貧しくするのです。」<sup>31</sup>

→ 誠実な人間でなければならないという確信を、子ども・若者が力強く生きることができるよう、私たちは教育者として、予防的スタイルでどのようなことを行っているでしょうか。

→ 若者や若者の家族が、自分の利益のために、どのような代償を払ってでも、不正、偽り、欺瞞を当然の事のように受け入れるということがないよう、私たちはどのような手本、考え方、行動を伝えているでしょうか。

→ 良心、批判精神、真理、真正さ、正義を擁護するために立ち上がることなど、本質的に人間性に関わる領域で、私たちは教育と福音的価値をもって何を作り上げているでしょうか。

腐敗は、あまりに多くの社会で当たり前になってしまった‘死の過程’です。それは現実の悪であり、（語られることのない）重い罪です。それにもかかわらず、主イエスがもたらされた希望には対抗しえません。その希望は、若者一人ひとりのうちに私たちが本当に蒔かなければならないものです。学校や青年のグループが常に市民／社会人としての教育の場であることをふまえ、教育や社会に関わる人皆が、我々の教育プログラムが目指すのはどのような市民／社会人だろうかと、自らに問いかけることが非常に大切です。今日、教育者は、科目を教え学ばせること、試験に備えることに教育を矮小化しようとする、大きな重圧の下にあります。

学校は、読み書き、計算を教え、科学や歴史を学ばせることに加え、世界観にすばらしい影響を与え、したがって私たちの社会を形作り、より良いものへと変えるために重要な、力強い道具であると、教育者の多くが、少なくとも世界中のサレジオ家族の事業所の教育者が信じていると、私は思っています。さまざまな問いを投げかけること、自分自身をふりかえり問うこと、人生の理想として提示されていることについて問うこと；自分のものの見方や考えを言い表すこと；置かれている環境や人生・生活の状況、それまでの過去や将来の夢について考えること；積極性、奉仕する心、批判精神を備えた、社会に影響を与えるためによ

---

31 フランシスコ、2019年3月18日、バチカン市国、監査役員会への謁見

く養成された、市民／社会人として自分をとらえることを、若者に教えることが重要です。教育とはこのすべてを意味します。

「教育するということは、自分自身を再発見できるように人を助け、価値観や自信を回復する旅を忍耐強く共に歩むことです。人生の美しさの発見を通して、生きる理由を再構築することです。教育とはまた、対話の力を新たにすることであると同時に、さまざまな興味を豊かに呼び覚ます提案でもあります。より良く生きるために必要なことにしっかりと結ばれ、日常の努力の意味をとらえる助けとなる体験に若者を参加させ、生活を<sup>まかな</sup>う基本的な手段を差し出し、あらゆる状況で責任ある行動を取れるようにすることです。教育を行うために、私たちの時代の若者の社会問題を、私たちは理解しなければなりません。」<sup>32</sup>

## 2.5. 「誠実な市民／社会人」 - 変化する世界、移住の現象を前に、心を開き共に責任を担う

この何年か各地を訪問したときに私自身が体験したことをお話しすることによって、皆さんに提案したいと思うことを伝えさせてください。私は、我らが会員とサレジオ家族の大きな創造力と献身に、大きな感銘を受けてきました。サレジオ会とサレジオ家族は、人々の移住というこの時代の大きな現象に应运ってきました。およそ 19 万人が身を寄せるケニア北部の難民キャンプ、カクマで、私はそれを目にしました。我がサレジオ会員たちは、キャンプそのものの中に暮らすことを許された唯一の団体として、技術訓練を提供し、オラトリオやユースセンターを開きながら教育 - 司牧活動に取り組むことによって、アフリカ各地から、特に南スーダンとソマリアから来た子ども・若者のあらゆるニーズの世話をしています。私はそれを、メキシコのティファナの意義深い事業で目にしました。経済発展した北と南の世界の境界であるその場所で、サレジオ会は、食糧の提供、ネットワークとなって広がるオラトリオを通して、未来を探し求める数多くの青少年のニーズに应运しています。暴力と麻薬の危険を未然に防ぎ、教育の機会を提供しながら、若者たちと共に歩んでいます。ローマの「イエスの聖心」共同体でも、小さいながらも活発なユースセンターがあり、若い大学生やボランティアが参加し、世界各地からの若い移民、難民をオラトリオの環境に温かく迎えています。このように、我らがサレジオ家族の暮らす全世界を巡るとき、どこでも若い移住者のニーズに応える創意工夫に満ちた働きを見いだすことができるのです。その感性が、私たちサレジオの DNA から生まれるものだからです。誤解を恐れずにこのように言うことができます。私たちは、移住者を迎え、移住者の世話をするために子らを宣教者として派遣した、自ら移住者だった人の息子、娘たちであると。

### 移住という現象

今日、移住の現象は **10 億人以上**に影響を及ぼすものとなっています；歴史を通して最大の人口移動が起きており、社会的、文化的、宗教的にますます複雑になり、不法移民の存在によってさらに混迷を深める現代社会の構造的特徴となっています。その原因はさまざまです：世界的な社会、経済の格差、政治的、社会的な危機が武力紛争や民族的、宗教的迫害へ



と発展すること、また気候変動や、地球のさまざまなところで進む砂漠化、そして今日、コミュニケーションと移動が大幅に容易、可能になったことがあります。

国連の統計によると、**国境を越える移民の数は今日、2億7,160万人**、世界人口の約3.5%に上ります。その内、3,900万人が18歳未満の未成年者です。国内移住者は2009年の推計で、7億9千万人に及びます。

非常に悲劇的なことに、**移住を余儀なくされた7,080万の人々**がいます：4,130万人の移住者は、特に戦争のため、自国内で移住を余儀なくされた人々です。自国を後にした人々は、2,590万人の難民、さらに350万人が庇護を求めています。以上は国連の公式の統計ですが、実際の数はもっと多いのではないかとされています。移住を余儀なくされた移民の半数は18歳未満の未成年です。家族が全くいない単身の未成年は11.1万人とされています。多くの場合、難民は都市に住んでおり（61%）、目に見えにくい存在です。

### ドン・ボスコ

私たち修道家族にとり、移住の現象は、私たちのカリスマにおいて何も新しいことではありません。

ドン・ボスコ自身、穏やかで素朴な田舎ベッキからキエリへ、その後、トリノの都会へと移り住みました。ドン・ボスコは初めから、この状況に直面しました。オラトリオに最初に迎えた少年たちは、ピエモンテの首府で仕事を見つけようと農村部からやって来た季節労働者、あるいは移り住んで来た移住者でした；イタリア語もピエモンテの方言も話せない若いよそ者だったのです。ドン・ボスコが少年たちを小教区から遠ざけていると思い込んだ一部の教会の司祭たちとの話し合いの際、聖人は、少年たちが皆よそ者であると言っています：

「ほとんどの少年たちは、ほかからやって来たのです。家族や親戚によってこの町に置き去りにされたのです；あるいは仕事を探しに来たけれども、見つけられずにいます。私の活動に最もよく通って来るのは、サヴォワやスイス、ヴァル・ダオスタ、ピエツラ、ノヴァーラ、ロンバルディアなどからの少年たちです。[...] 故郷を遠く離れ、さまざまな方言を話し、決まった滞在先はなく、この町に不案内なのです。こういったことを考慮すると、どこかの小教区に所属することは、不可能とは言わないまでも難しいのです……」<sup>33</sup>

サレジオの宣教事業は、アルゼンチンのイタリア系移民を世話することから始まりました。ドン・ボスコは、1875年の最初の宣教派遣の際、次のように勧めを与えました：

「貧困や不運のために見知らぬ土地へ移住を余儀なくされた兄弟を探し出し、神のいつくしみがどれほど大きなものであるか、教えてください。神はその兄弟たちの靈魂の善益のため、あなた方を助け手として送られたのだと。」<sup>34</sup>

---

33 ジョヴァンニ・ボスコ、オラトリオ回想録 *Memoirs of the Oratory*, ISS, Salesian Sources. *Don Bosco and his work*. LAS, Roma, Kristu Jyoti Publications 2017, 1413.

34 CERIA E., *Biographical Memoirs of St John Bosco*, Vol. XI, New Rochelle 1964, 360.

ドン・ルア、ドン・アルベラの時代のサレジオ会は、イタリア系移民への世話をさらに力を入れながら、ポーランド系、ドイツ系の移民にも奉仕するようになりました。移民の間で行われた多大な活動を思い起こすことができるでしょう；すでに 1904 年には、アメリカ大陸だけで、45 万人の移民がサレジオ会に助けられていました。<sup>35</sup> ドン・ルアのもと、「サレジオ移民委員会」が設立され、数年にわたって活動しています。アメリカ大陸、アフリカ、中東の、あるいはヨーロッパ内のヨーロッパ系移民のため、また共産主義政権の時代、東ヨーロッパから西ヨーロッパへ逃れた移住者のための奉仕など、移民に提供された奉仕は膨大なものです。

したがって、移住の現象は、常に何らかの形でサレジオの歴史に存在してきました。今日、若者の移住という挑戦は、はるかに幅広く複雑になっています。その文化的、社会的、宗教的な側面のため、また人口動態に与える大きな影響、さらに情報技術、グローバル化、移動が簡単になったことなどに関連する諸側面のためです。この状況を前にして、伝統的な、同胞の世話をする民族 - 国民に目を向けるアプローチに比べ、**交わりの司牧アプローチ**（人々を迎え入れ、一致を築く努力）がより必要になっています。私たちもまた、難民、同伴者のいない未成年、人身取引・売買など、新たな、悲劇的な現象を前にしています。これらはすべて、サレジオ家族に大きな挑戦を投げかけるものです。21 世紀の新たな「若者の大陸」を、私たちは前にしているのです。

### 未来のためのビジョン

私たちは今日の世界で、どの若者たちに目を向けているのかという問いに対し、確かに、移住を余儀なくされたこの何百万もの子ども・若者たちは、私たちに挑戦を投げかけていると言えるでしょう。この状況の中、前線や緊急事態の働きに加え、ドン・ボスコの家族の事業の多くは、何百何千という子どもや十代の若者、若い移民の第一世代、第二世代を**施設に迎え入れています**。その子ども、若者たちは、喜びのうちに私たちの教育共同体に受け入れられています。この尊い奉仕は、全体として非常に静かに、思慮をもって行われていますが、移住する若者にとって重要な助けになっています。住まいを提供し、市民社会に、時に教会に、効果的に、自然に、溶け込めるよう助けているのです。

この多くを要求される、人々の移住する世界にあって、私たちの活動はカリスマのアイデンティティーから出発するものでなければなりません：

→ 第一に子ども、十代の若者、青年に目を向け、充実した教育 - 司牧のコースを提供します。

→ 教育 - 福音化のアプローチを維持し、単なる NGO になってしまうことを避けます。事業は教育共同体にゆだねられます。奉獻生活者と協働者の生活の交わりのうちに、細やかな配慮を要するその使命に必要な技能を活かしながら。

→ 私たちの奉仕の対象者の物理的、存在論的な空間にできるかぎり溶け込む「教育的存在」となること。

---

35 MOTTO F., *Bosco (Don) Giovanni e la missione dei Salesiani per i migranti*, in, BATTISTELLA G. (a cura di). *Migrazioni. Dizionario Socio-Pastorale*, Cinisello Balsamo (Milano) 2010, 62.

→ 単なる人道活動家、福祉サービスの提供者としてではなく、教育者、牧者として、共にいる教育者、友であること。

→ 「予防」に焦点を当てること。それぞれの文化環境で技能を身につける機会を若者に提供するように努めます。尊厳をもって自らの社会の一員となり、移住に駆り立てられる必要がなくなるように。すべての若者は、移住せずにいる権利があります。

→ 常により連携調整され、組織立てられた、より目に見える、専門性の高い存在であること。各会が使命のためにそれぞれの賜物を貢献でき、サレジオ家族が働きかけを行うことのできる、大いなる機会です。サレジオ宣教ボランティアとサレジオ青年運動 SYM にとって、この移住する若者のための取り組みの可能性は、大きく開かれています。

この移住者の大陸は、21 世紀を生きる私たちに重大な挑戦を投げかけます。私たち皆にとって、その存在そのものが司牧、カリスマ、召命の刷新の真の源泉、その理由となりうるものが提起されているのです。

## 2.6. 「誠実な市民／社会人」 - 若者が願うように、人類が共に暮らす家を世話する人

人類が共に暮らす家のために責任をもって働くこと（『ラウダート・シ』が示したエコロジーの視点）は、二次的に付け加えられた取り組みではありません：この視点は、私たちの文化、信仰、生活のあり方、使命の働き、教育、福音宣教を根本から問い直すよう求めます。その上、エコロジーは、全人的な教育的提案となりうるものです（その人間的、霊的な価値において）。

共に暮らす家を世話すること、あるいは神の造られた世界を世話することについて語るとき、私たちは選択肢を前にしているわけではありません。むしろ、正義の本質的問題を前にしているのです。なぜなら、私たちが受け取った地球は、私たちの後に続く人々のものでもあるからです。環境は、すべての世代が貸し付けられたものとして受け取り、後の世代に引き渡していかなければならないものです。

### 司牧のための提案

→ エコロジーにおける回心

最初の提案は、メンタリティーを、世界の現実を見る見方を変えることに深く関わることです。教皇フランシスコは私たちを招きます。「痛みをもって気づくこと、世界に起きていることをあえて自分自身の個人的な苦しみとすること……です。」<sup>36</sup> そのため、私たちは徹底的に新しい霊性を採り入れなければなりません。実効性のあるエコロジーにおける回心に根ざすことによって、責任をもって地球を世話する私たちの献身が、支えられ、効果的なものとなる霊性です。

---

36 フランシスコ, ラウダート・シ, 19

私たちは、環境問題をその倫理的、霊的な原因まで掘り下げるよう招かれています。そのことによって、技術を用いるだけでなく、人間が変わることによっても解決策を探るようにと、招かれます。消費から犠牲を払うこと、食欲から他者にかかれた心へ、物を無駄にすることから分かち合えることへ、「私が欲しいもの」から「神の造られた世界が必要とするもの」へと、皆が前進しなければなりません。

→ 共に暮らす家のための、責任ある取り組みに参加する若者と共に歩む

誰も想像できなかったこと、ましてや‘この世の地位と力のある者’には想像できなかったこととして十分にありうるのは、ほとんど世界的な規模の運動による最大の反応と抗議が若者たちから起こるかもしれないということです。世界には環境問題に精通する若者たちがいて、彼らは共に暮らす家を守るために積極的な市民として役割を發揮しています。

- グレタ・トゥンベリ、16歳の若いスウェーデン人活動家は、2019年、気候変動について話し合うためニューヨークの国連サミットに集まった世界のリーダーたちに言いました：「あなたたちは空しい言葉で私の夢、私の子ども時代を奪ってしまった。集団絶滅が始まろうというのに、あなたたちはお金の話、終わりのない経済成長というおとぎ話しかできない。恥を知りなさい！ あなたたちは私たちを騙している。でも若者たちは、あなたたちの裏切りに気づき始めている。」<sup>37</sup>
- この強い言葉はリーダーたちへの挑戦であり、大人のものを見方を変えつつあり、共に暮らす家を救うための、若者による幅広い運動を導いています。「ラウドート・シ世代」はその具体的な例です。これは、800以上のカトリック団体が参加し気候変動に取り組む国際ネットワーク、「カトリック世界運動 Catholic World Movement」の「青年部門」です。この若者たちは、気候変動における正義のために働き行動するよう、教会と社会に訴えています。「ドン・ボスコ緑の連合 Don Bosco Green Alliance」と「サレジオ青年運動 Salesian Youth Movement」は、サレジオ家族を代表し、この国際ネットワークの積極的なメンバーとなっています。
- 私たちは若者の教育者として、行動する意欲に満ちた若者だけでなく、窓の前、パソコン画面の前でソファにもたれている若者たちにも同伴します。同時に、若者が、行動を起こそうと仲間の背中を押すことに大変長けていることを私たちは思い起こします。<sup>38</sup>

→ 人間のエコロジーに向けて

環境エコロジーは本質的に、統合された全人的エコロジーについて振り返るよう、私たちを促します。1970年代から、教皇聖パウロ6世以来、後を継いだ教皇たちも皆、常にこの点を主張してきました。「人間のエコロジー」は教皇聖ヨハネ・パウロ二世が回勅「新しい課題 - 教会と社会の百年をふりかえって *Centesimus Annus*」で使った言葉です。<sup>39</sup> この考えを再び取り上げ、教皇フランシスコは述べます。「人間環境の破壊はきわめて深刻な問題です。それは神がわたしたち男性、女性、一人ひとりに世界を託されたからというだけでな

37 #FridaysForFuture e #Climatestrike 参照。

38 Pope Francis, 2018年1月17日, チリ訪問の際の若者へのあいさつ。

39 Joshtrom Isaac Kureethadam, *I dieci comandamenti verdi*. Torino: Elledici, 2016, 142.

く、人間の生がそれ自体たまものであって、さまざまな質低下から守られねばならないものだからです。」<sup>40</sup>

→ 教育的、文化的アプローチ

- 聖ヨハネ・パウロ二世は、エコロジーの危機が叫ばれる以前、すでに、教育、文化における大きな働きが緊急に必要であると語りました。<sup>41</sup>
- 共に暮らす家を世話するための私たちの教育的提案は、情報・知識を伝える、教育する、文化を構築する、という3つの段階に基づいています。<sup>42</sup>
- 消費主義の現象を前にして、3つの原則（3R）を若者が思い起こすようにすることが必要です：減らす reduce、再利用する re-use、リサイクルする recycle。
- 環境問題は、不正義の構造の結果であることを私たちは知っています。この問題に取り組むには、恵み、和解、いやしの、そして環境的、人間的、社会的、統合的なエコロジーの、善に基づくさまざまな構造が必要です。<sup>43</sup> 私たちが教育者として若者に示さなければならないのは、これらの構造です。
- エコロジーにのっとった市民のあり方へと向かうさまざまなプロセスを始めるために、サレジオの感性に非常に近い、基本となる考察があります。例えば、サレジオ会員ジョシュトロム・アイザク・クリータダムは、教会のこの問題に取り組む部署で働いています。彼の著書『*I Dieci Comandamenti Verdi* 緑の十戒』には、神の造られた世界への大いなる感性を若者たちのうちに育み続けるための、多くのアイディアを見いだすことができます。政治リーダーたちが経済的な理由やその他さまざまな利害のために望まない、あるいは真剣に考えようとしないうことを、夢見、現実のものとするアイディア」です。

## 2.7 人権、特に青少年の権利の擁護

サレジオ家族に強い呼びかけをする差し迫った必要を、私は感じています。今、そして将来、私たちが青少年一人ひとりを擁護することにおいて際立つ存在となるように。私が伝えたいメッセージの核心はまさに次のことです：

→ 私たちがサレジオ家族としてドン・ボスコのうちに聖霊によって興されたのは、私たちが人生・いのちのすべてを青少年、世界の子どもたちにささげるためです。最も自らを守るすべを持たない、最も助けを必要とする、最も弱く、最も貧しい青少年を第一に優先して。

→ そのため、私たちは人権擁護の分野で、特に青少年の権利について、専門家とならなければなりません。そしてそのように行動していない人がいるなら、涙を流すほど悔やみ、ゆるしを請わなければなりません。私たちは、いかなる虐待にも加担することはありえません。

---

40 フランシスコ、ラウダート・シ、5

41 ヨハネ・パウロ二世、回勅新しい回勅 - 教会と社会の百年をふりかえって *Centesimus Annus*, 36

42 Aldo Coda Negozio, Guglielmo Aldo Ellena, *Gestire il pianeta terra*, Torino: Società editrice internazionale, 1995, P. XI.

43 Tebaldo Vinciguerra, 'Ecologia', *Note di pastorale giovanile*, p.74.

虐待とは、シノドス「若者、信仰、そして召命の識別」の際に述べられた、「力によるもの、良心への虐待、性的虐待、経済的虐待」などです。<sup>44</sup>

私たちはドン・ボスコの家族として、教会による人権擁護の努力全体の一部を担っています。私たちが皆知っているように、人権についての概念は、教会の社会教説の発展に伴い、教会の生活に入ってきました。教会は、自らにゆだねられた福音の力をもって人間の権利を宣言し、今日、あらゆるところでこの権利が促進されているダイナミズムを認め、大いに評価します。

市民社会がさまざまな形で人権を擁護するために働く一方、私たちドン・ボスコの家族は、教会もそうであるように、今日、人権の客観的次元を取り戻すよう呼ばれています。それは次の認識に基づくものです。「人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利とを承認することは、世界における自由、正義及び平和の基礎である」<sup>45</sup>。このような理念がなければ、権利は短絡的にとらえられ、「利己主義から生まれた無関心のグローバル化、真理を受けとめ、真正な社会的次元を生きることのできない人間のあり方の帰結」<sup>46</sup>が助長されるでしょう。今日、見られる誘惑は、「権利」という言葉を大きく強調し、より大切な‘人間の’をおろそかにすることです。権利が人間性との結びつきを失うなら、利益団体の主張にすぎないものになるでしょう。

- ドン・ボスコにとり、疎外された少年は受動的な受益者、差し出される支援やサービスの単なる受け手ではありませんでした。ドン・ボスコは、疎外された少年の新しい見方を掲げます：教える者、教えられる者の間の教育的関係です。それは諸権利の主体として子どもをとらえる見方を想定します。このとらえ方は、30年前、1989年11月20日、ニューヨーク協定によって、国際法を支えるものとして初めて確認されました。現在、193か国が、この協定の法的拘束力の下にあります。
- 青少年の権利と予防教育法は、いくつか共通する基本原則があります。両者は同じ目的を持っています。すなわち、子どもの全人的成長と全人的な幸福です。子どもたちのための目標を達成するために、「子どもの権利」と予防教育法はともに、果たすべきことがあります。一人ひとりへの全人的な配慮、責任を担う担当者の養成、健全な環境を作ること、建設的な秩序のための指針を示すこと、未成年者保護のルール・手続きをまとめることなどがそれに含まれます。

### 青少年の権利の擁護のために

- 1. 2019年2月21日から24日にかけて、世界カトリック司教協議会の「サミット」が、「教会における未成年者の保護」をテーマに開催されました。190名に及ぶ教会指導者と140の司教協議会会長らが参加しました。この会合で教皇フランシスコは、私たちは聖霊に温順に、正義を求める小さな者たちの叫びを聞かなければならない、と述べました。すべてのスキャンダルは福音の光を見えなくするものであり<sup>47</sup>、権力の乱用、良心を踏みじめることは、多大な害を与え、極めて危険であることを、私たちはよく知っています。

---

44 司教シノドス、前掲書、最終文書30。

45 世界人権宣言、1948年12月10日、前文

46 フランシスコ、2014年11月25日、ストラスブール、ヨーロッパ委員会へのあいさつ

47 ベネディクト十六世、アイルランドの信徒への教皇司牧書簡、(2010年3月)

- 2. 私たちは、国連の「子どもの権利条約」に触れることなく未成年者の権利について語ることはできません。条約は、子どもを 18 歳未満のすべての人間と定義し、世話と保護の基準、さまざまな問題の特定と対処、報告と仮命令の基準を提供します。子どもの権利の 4 つの側面を特定しています：子どもに関する決定に子どもたちが参加すること；差別と、あらゆる形の養育放棄、搾取からの保護；被害の予防と、基本的必要における子どもへの支援です。
- 3. 子どもたちに耳を傾けることは、シノドスでたびたび確認されたように<sup>48</sup>、私たちの教育司牧計画において重要で欠かせないことであり、全面的な参加に道を開きます。そして参加は、一人ひとりの成長に寄与し、よりよい決定と結果に導き、未成年の保護に役立ち、市民社会の成長と発展に、寛容さと他者の尊重に寄与し、責任感を強めさせます。
- 4. 未成年の権利について知識を深め、考察すること：人権、特に児童の権利に関する多くの文書、宣言が絶えず出されています。教会が出す世界レベルのもの、また地域レベルの、あるいは特定の問題に関するものなどがあります。<sup>49</sup> これらの文書について無知であることは、効果的な教育者であるための障害になるにちがひありません。したがって、これらの文書をよく考察し、私たちの事業所で伝えていかなければなりません。
- 5. ほかの団体とのネットワーク：私たちは未成年者の権利の擁護と促進の使命において、「人権の理念」に基づいて活動するほかの多くの団体とネットワークを築く必要があります。政府系、また非政府系のそのような団体は、実に数多くあります。世界の一部の管区では、サレジオ会員が「少年司法委員会」のメンバーになっており、その委員会を通して青少年の権利を擁護し、守ることができます。弁護士資格を持つサレジオ会員もいます。彼らは法廷で未成年の権利を弁護し、子どもたちのために正義が行われるよう働いています。これは、世俗の領域に福音的価値を広めるすばらしいフォーラムの場となっています。
- 6. 「子どもの保護のシステム」を UNICEF はこのように説明しています。「予防と、保護に関連するリスク対応を維持するため、社会のあらゆる部門において必要な、法、政策、規則、サービスの総合」。私たちの事業所の多くは、社会福祉活動に、また危険にさらされた青少年のためのセンターとして、全面的に取り組んでいます。この働きは、サレジオ家族としての「小さいけれども見事な」貢献であり続けなければなりません。
- 7. 世界中のサレジオ家族のすべての事業所に、「道德規範」は不可欠です。男女の奉獻生活者、協働者の教職員・教育者、皆に求められることを明確に定義するものです。それはまた、規範の深刻な違反についても明確に定義するものです。
- 8. 最後になりますが、基本的なこととして、奉獻生活者である私たちが強めなければならないのは、個人として、また共同体としてのキリストとの絆です。キリストが共に歩んでくださることは、キリストがとても愛しておられ、弟子としてのあり

48 司教シノドス、若者、信仰、そして召命の識別、前掲書、6

49 自発教令、未成年者と弱者の保護について、29, March, 2019 年 3 月 29 日発布 - バルト三国協議会事務局, *Guidelines: promoting the human rights and the best interests of the child in transnational child protection cases*, Sweden: 2015. - Rachel Hodgkin and Peter Newell, *Implementation Handbook for the Convention on the Rights of the Child*, UNICEF, 2007.

方の模範として示された子ども、未成年を守るため、より努力して働くよう私たちが照らすはずです。

- 予防教育法と人権：2つの提案

- 私たちは共に、人権を促進するため、多くの良い、すばらしいことを行っています。しかし、この奉仕職においてより効果的であるために、考え方、行動のしかたにおける戦略を変えなければなりません。私たちは愛徳の社会的次元を支持し<sup>50</sup>、予防教育法を創意工夫豊かに用いることによって人権を促進する、ドン・ボスコの家族となる必要があります。これが必要とされるモデルチェンジです。

1. 予防教育法を、ただ単に禁圧的教育法に代わる選択肢ととらえることから、人権を促進する優れた手段としてとらえることへと前進する：これまで、単に禁圧的教育法と異なる教育法として予防教育法をとらえることが習慣になっていました。人権の分野における予防教育法の可能性に、私たちは十分目を向けてきませんでした。人権促進のために予防教育法が内在的に備えている可能性を考察、説明し、この分野でそれを活かす必要があります。

2. 市民に関する法の形成から、市民が求める権利へと前進する：教育の目的の一つは誠実な市民の養成であると、私たちは常に言ってきました。それは法を順守するよう市民に力をつけることを意味すると、私たちは理解してきました。将来に向けて、ますます複雑になる世界において、それだけでは十分でなくなるでしょう。自分たちの権利を求めるよう、私たちは若者を教育しなければなりません；実際、権利を求めることをしなければ、それが無視されることは十分ありうるのです。<sup>51</sup>

## 結びの言葉 - 政治について、ドン・ボスコ自身の語る言葉に耳を傾ける

私にとってとても重要で、極めて今日的と思われるさまざまな側面に触れてきたこの長い話を、ドン・ボスコ自身に語ってもらい、結びたいと思います。引用が可能なさまざまな言葉の中から、1883年7月15日、ドン・ボスコの祝い日を祝うためオラトリオに帰ってきた同窓生へのあいさつを選びました。ドン・ボスコの言葉の驚くほど多くの部分が政治について触れています。たいへん光を与えてくれるもので、ここまで述べてきたことにとっても通じるものがあると思います。ドン・ボスコはこのように言っています：

---

50 第23回総会文書. 204, 209, 212

51 Jose Kuttianimattathil, 'Don Bosco's Educative Method and the tenets of the Universal Declaration of Human Rights'; in: Charles Maria, Pallithanam Thomas, Dörrich Hans-Jürgen, Reifeld Helmut; *In Defence of the Young*; New Delhi 2010.



「私たちが善をなすために、天の助けのほかに私たちを助け、将来も助けるのは、私たちの仕事の特質そのものです。私たちが行おうと目指すことに、すべての人が好意のまなざしを向けています。私たちと宗教の考えを共有しない人々も含めて。私たちが妨害しようとする人がいるなら、その人たちは私たちを知らないか、あるいは何を行っているかを知らないのだと言わねばなりません。見捨てられた、あるいは危険にさらされた若者に、市民としての責任ある行動を身につけさせ、道徳教育を行い、悪徳、悪い習慣、恥辱、さらに刑務所からも救い出すこと - これが私たちの活動の目的です。良識ある人、行政の責任者のいったい誰が私たちを止めるでしょう？

最近、ご存じのように、私はパリへ行きました。あちこちの教会で講演し、私たちの活動のために支援を願いました。ありていに言えば、決して食欲の衰えることのない少年たちのパンとスープのためにお金を求めたのです。実は聴衆の中には、政治についてのドン・ボスコの考え方をすることだけを目的に来た人たちもいました。中には、私が革命をたきつけるためにパリに来たと思っている人さえいました。ほかの人たちは、私が政治政党に勧誘するために来たと思うなど、さまざまでした。……誰かが愚かしいたづらを私に仕掛けるのではないかと心配してくれる親切な人たちもいましたが、私が話し始めたとき、こういったさまざまな奇妙な考えは、人々の不安と共に消えてしまいました。ドン・ボスコはフランスの端からもう一つの端まで思うまま旅ができるようになりました。そう、実に私たちの活動は政治に関わりません。私たちは法にのっとりた権威を尊重し、守るべき法律を守り、税金を払い、活動を続けます。求めているのは、貧しい青少年のために善を行い、霊魂を救うことをさせてほしい、ただそれだけです。必要なら、私たちも政治を行います。しかし全く無害な、むしろどの政府にとっても益となるような方法で行います。政治とは、国家をよく治める科学、<sup>すべ</sup>術として定義されます。さて、イタリア、フランス、スペイン、アメリカ大陸と、オラトリオは根づいたすべての国で、特に貧しい若者の支援を実践しながら、非行少年や浮浪者の数を減らし、つまらない犯罪に走る者や泥棒の数を減らし、刑務所を空にしていく働きをしています。一言で言えば良い市民を育てているのです。良い市民は、公的権威に面倒をかけるどころか、社会の秩序、穏やかさ、平安を保つために支えとなります。これが私たちの‘政治’です；これまで、私たちはこのことに取り組んできたのであり、これからもそうです。」<sup>52</sup>

私たちの母、無原罪のキリスト者の扶けの、母としての取りなしによって、聖霊を送ってくださいよう父なる神に願いましょう。今日の若者のため、私たちが真実な主の祈りの政治を今後も果たしていくことができますように。社会の不正義・不平等を前に、沈黙にとどまり傍観者でいることがないようにと私たちに呼びかける社会で、そしていつも神を必要とする世界で。私たちが日々、ますます神の「あかし人、弟子なる福音宣教者」となれますように。その神は、人間の自由を細やかな配慮をもって尊重されながら、ご自分の息子、娘たちとの「出会い」を待っておられるのです。

そこで、祈りましょう：

---

52 サレジオ史研究所, *Salesian Sources. Don Bosco and his work*. LAS, Rome, Kristu Jyoti Publications 2017, 120

主イエスよ、  
あなたの福音を実践するために  
私たちにどれほど努力が必要か、あなたはご存じです  
ドン・ボスコのうちにあなたを観想するよう助けてください  
ドン・ボスコのふるまい方にあなたの愛を見ること  
ドン・ボスコの行動にあなたの道を識別すること  
ドン・ボスコの愛情にあなたのいつくしみを知ることができますように  
ドン・ボスコがあなたの弟子として生きたスタイルを  
自分のものとしてできるよう、私たちに光をお与えください  
私たちの心を、良い羊飼いであるあなたの心にかたどり  
あなたの言葉を、生き方と働きへと変容させる力をお与えください<sup>53</sup>

総長

アンヘル フェルナンデス アルティメ神父, SDB

---

53 Xabier Matoses, *Spirito Salesiano*, en J. José Bartolomé (ed), *Luce sui miei passi*. Elledici, 2016,